

## 徳 雲 寺

- ① 由緒 山口県小鯖町鳴瀧泰雲寺の三世覚隠永本禅師が、3 藍婆鬼を濟度して開創した。時の領主、宮下野守政盛公が禅師の高徳に帰依して、祖先供養並びに国土安穩のために、後花園天皇文安 3 年（1446 年）起工し、12 年かかって長禄元年（1457 年）に竣工して、350 石を付した。当時、七堂伽藍を完備し、禅風を宣揚し地方文化に貢献する。殊に 4 世仏頂堅眠禅師より 8 世大奥鐵通禅師に至る 5 代 100 年間は、勅特賜紫禅師号を賜り、勅使御差遣の栄に浴し、黒門と言われる勅使門が今も残っている。しかし、慶長年間（1596 年）福島氏の芸備地区の支配により、寺領はことごとく没収され、経営が困難となる。ついで浅野氏の時代になり、わずかの郡公費により維持経営していたが、文久年間の郡制改革の際、ついに一切の維持費は檀家の負担となり寺運は衰えたが、昭和 10 年・11 年に現在の伽藍が大修理され、今なお、末寺 53 ヶ寺を有する中本山である。しかし、曹洞宗内の記録では、徳雲寺の実質的な開山は覚隠永本ではなく、彼の弟子のていあんそうぼい鼎庵宗梅であったとしている。師匠である覚隠永本の名前が余りにも有名であったためか、徳雲寺の開創伝説の主役はいつからか、弟子から師匠に代わってしまったというのが真実であろう。

- ② 備後西国三十三ヶ所観音霊場  
徳雲寺の本尊は聖観音菩薩で、観世音が三十三の姿に変わって衆生を救うとされ、これが基になって備後西国三十三ヶ所観音霊場の巡拝がおこなわれてきたが、徳雲寺は第 22 番札所になっている。

- ③ 鬼うす  
本堂より東北に 600m の山中に自然石の臼がある。6 代孝安天皇の際、雲州杵築大明神初現の時に十鬼あり、その中の藍婆鬼という鬼神がここに来て住み、色黒く飛ぶこと飛鳥の如く出没して領民を苦しめた。覚隠禅師これを聞かれ、住民に安堵を与えんと遠路こられて、数日、石の上に座禅をしておられた。ある夜一人の老翁が来て問答すること数回、遂に鬼の本性を現して、自分の角を 1 本折って禅師に献上し、「願わくは吾の罪障をざんげするために、この山を開いて寺を建ててください。私はここを去ります。」と云って姿を消した。禅師は、後に山中に鬼臼を発見して鬼臼峯と名づけた。角を折って献じた故事により、当山に限り角のない鬼を書いて寺紋と

している。鬼臼は、自然石で約 30 cmの臼穴があって常に苔水を蓄えて、旱天でも枯渴することなく遠近より、雨乞いに詣る人が多かった。

※藍婆鬼：昔、ここの岩窟に色黒くして飛ぶこと飛鳥の如く出没自在なる悪鬼が住んでいて、猪、鹿、狼、熊を捕らえ引き裂いて常食とす。後には山に入る木こりを捕らえ或いは人里に出て児女を捕りかえり、石臼の如き石の窪みに押入れ挽き砕き肉泥となし骨と供に食らう、故に里人絶えて山に入る者なく、行き交う人もなかりし…… 「広島県八幡村自治五十年志」

#### ④ 五重塔

勅使門の向かいの松林の中にあり、石造にして天保2年田黒村浜田金右衛門祖先追福のため、建立する。

#### ⑤ 山中鹿介の首塚

徳雲寺世代墓の左奥にあり

なぜ徳雲寺に山中鹿介幸盛の首塚があるのか？

##### ① 尼子勝久と徳雲寺の関係

天文23年、尼子式部大輔誠久（新宮党党首）、同族春久のため滅さるるや其の第三子助四郎（後の勝久）生まれて二歳なるを乳母懐に抱き逃れ出て徳雲寺に來り救援を乞う、住職木中圭抱和尚（五世 勅徳賜紫覺海道智禅師）之を哀れみ留めて教養すること十余年、永禄9年尼子義久毛利に降るに及び助四郎依然毛利氏の領国に居るの不可を思い京都に上り東福寺に入りて修行せり。このような事を契機にして、出雲戦国武将尼子家と徳雲寺は密接な親交があったと思われる。

② 天正5年、中国攻めの秀吉に従い、鹿介は勝久を奉じて上月城にこもる。しかし毛利方により城は落ち、主君の尼子勝久は自害したが、鹿介は自害せず毛利氏に降伏した。しかし鞆の浦にいた毛利輝元の下へ護送される途中、備中の阿井の渡しで謀殺された。首級は鞆にいた室町幕府最後の将軍、足利義昭や輝元によって首実験が行われたという。首塚は鞆など他所にもあるが、徳雲寺にはその首を奪い持参したという家来の墓が首塚のそばにある。ちなみに鹿介の長男 山中幸元は父の死後、武士をやめて酒造業で財をなし、後の鴻池財閥の始祖といわれている。

